



Title	第二次世界大戦下のヒトラー・ユーゲント
Author(s)	戸田, 博史; TODA, Hirofumi
Citation	北海道大學教育學部紀要, 68, 289-293
Issue Date	1995-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29488
Type	departmental bulletin paper
File Information	68_P289-293.pdf



第二次世界大戦下のヒトラー・ユーゲント

戸田博史

Hitler-Jugend im zweiten Weltkrieg

Hirofumi TODA

ヒトラー・ユーゲント (Hitler-Jugend 以下HJと略記) は、1926年7月に「ヒトラー・ユーゲント ドイツ労働者青少年同盟」として正式に発足し、「第三帝国」が崩壊した1945年の最終段階に至るまで存続した。このおよそ20年間にわたるHJ史は、他の青少年団体と比較してもごく僅かな影響力しか有していなかった、HJ発足からナチ政権成立の1933年までの「闘争期」、他の青少年団体の禁止措置や吸収、1936年12月の「HJに関する法律」の発布を経て、唯一の国家的青少年団への発展を遂げ、1939年3月のHJ法施行令の発布によって強制的な性質が強まった段階、そして1939年9月からドイツ敗戦までの戦時期に区分できる。

「第三帝国」下の青少年にHJが与えた影響、ナチ体制下におけるHJの位置づけを検討するに際して、戦時期HJの考察は不可欠である。また、戦時にドイツの青少年が、どのような形で戦争にかかわり、あるいは巻き込まれていったのかを知るために、10歳から18歳のすべての青少年に入団が義務づけられていた戦時期HJを検証の対象とすることは、一つの有効な手掛かりである。

しかしながら、HJを中心の考察対象とするこれまでの先行研究が十分に戦時期HJを検討し、明らかにしたとはいえない。本論では、戦時のHJが深く関与した諸活動に関する先行研究や、資料集、当時の雑誌記事を参照しつつ、戦時HJを多角的に検証し、戦時HJの特質を明らかにすることを課題として、戦時におけるHJの活動とその展開を以下のように明らかにした。

ヴァイマル共和国期において、数多くの青少年団体の中でごく非力な団体であったHJは、ナチ政権成立と同時にこれらの諸団体を併合あるいは禁止し、巨大な青少年団体へと発展していった。この過程では、「闘争期」とは対照的に組み込むのが困難になっていた若年労働者などを、青少年運動からその形態を継承した魅力的な活動の実施や組み込むための方策を取ることで「自発的な」入団が促進された。またHJの活動内容を、学校と家庭以外の青少年のすべての活動領域に拡大し、これまで各青少年団体に属していなかった農村部に至るまで掌握体制を整えていった。また全国青少年指導者ソーラハを頂点とする全国青少年指導部の組織もその目的に応じて大規模であった。これと平行して、「HJ—労働奉仕—国防軍」というナチ教育システムの確立を宣言するHJ法の発布や、罰則規定を盛り込んだHJ法施行令による入団義務の導入といった強制的手段が講じられ、戦争勃発前にHJは強制的国家的青少年団への発展を遂げていたのである。このことは第二次世界大戦における青少年総動員の前提条件であり、HJは各種学校の生徒や若年労働者を一括して掌握し、出身階層や現在の身分に関係なく、青少年を総体的に動員するための機能を備えた機関となった。またHJでは魅力的活動と組み合わせ、あるいは平行して、後の全国青少年指導者アクスマンが戦争開始後に「その価値が極めて高く評価された」と自賛した一連の戦争準備教育が行われた。毎週水曜日の夕方にHJ団員が集合するハイムアーベントの最も重

要な内容は世界観教育であり、「闘争期」H J時代に共産党員によって殺害され、シーラハが「ヒトラーの名を担う全青少年の犠牲心のシンボル」であるとしたヘルベルト・ノルクスやランゲマルク「神話」が題材として取り上げられ、また「青少年に前線経験を伝えるために」数多くの退役軍人が動員された。党や国家のために、そしてヒトラーのために死を恐れずに戦うというモチーフは、ハイムアーベントや式典、キャンプなどで歌われたH Jの歌にも頻繁に登場した。世界観教育、射撃など軍事教練の要素をもつスポーツ、早いうちから軍に関わりの深いスポーツや技術に対する青少年の興味を喚起することに狙いがあったH J特別部の活動を通じて、後にヒトラーから「ファナティックな戦いぶり」と称賛される兵士の精神的土台が形成されていたのである。

1939年9月のドイツ軍のポーランドへの侵攻に端を発した第二次世界大戦の勃発は、従来のH J指導体制とH J活動を大きく転換させた。全国青少年指導部は各部局を3つの司令部に統合することで任務範囲の集中化が企図された。戦争勃発後1カ月でおよそ109万人のH J団員が、駅業務、防空壕の構築、野戦病院の補助、食料の引き渡しなどの銃後活動に動員された。それと同時に軍事教練が全面に押し出された。多数のH J指導者が軍に召集されたために、これまでのH J指導体制が崩れ、指導者の低年齢化や活動の停滞を招いた。しかし「電撃戦」による短期間のドイツ軍の勝利は、H Jの戦争教育に弾みをつけた。戦前には、ハイムアーベントに第一次世界大戦の前線兵士が投入されていたのであるが、いまや凱旋したばかりの兵士が一面的な戦争観をH J団員に与えることに寄与した。H J団員たちは、こうした銃後活動や兵士との会話を通じて、自分たちもこの勝利の戦争にともに参加しているのだという一体感をもち、フランス占領を頂点とするドイツの軍事的成功の中で現実とは遊離した戦争観を得たのであった。

H J指導者の絶対的不足の問題は、戦時期を通じてH J活動遂行上の最も大きな障害であった。この問題に関してとりわけ特徴的だったのは、傷痕軍人をH J指導者として受け入れようとする試みであった。これに応じた軍人がどのくらいいたのかは不明であるが、傷痕軍人がH Jの指導者として青少年の前に姿を現したことは、戦争の初期段階で前線から凱旋してきた軍人が、あらかじめH J側から指示を受けてハイムアーベントで勝利の報告をしたのとは対照的に、戦争の現実を青少年に知らしめることになった。

戦争の長期化は、H Jに新たな任務を課した。なかでも学童疎開(Erweiterte Kinderlandverschickung, 以下K L Vと略記)は、H Jが積極的に関与した戦時活動のひとつであった。ヒトラーはK L Vの最高責任者として既にウィーンの大管区指導者であったシーラハを指名したが、このことは、その後のK L Vにおける教育形態を強く規定することになり、K L Vに対するH Jの介入を容易にした。1940年12月にK L V全国本部は、K L V全国学校を設置し、1942年末までにK L Vに派遣されるH J指導者、男子6,393人、女子3,767人が養成された。H JはK L Vキャンプに派遣されるH J指導者を送り込むことによって、家庭を排除し、学校の影響力をできるだけ制限することで、H Jの理想とする教育を実行に移そうとした。H J側は親がK L Vに関与してくるのは明らかな「妨害」であり、「無分別な行動」とみなした。K L Vはドイツ国内のみならず、ドイツ占領地にまで及んでいた。ポーランドに設置されたK L Vキャンプは、戦前に実施されていた国境旅行の延長であり、H Jの女子団員を中心として行われたH Jの東方動員とともに、東方政策の一環としての民族教育の実施にその本当の目的があり、ヒトラー・ドイツが戦争に勝利したことを青少年に実感させた。しかしながらスターリングラードでの敗北以降のソ連軍の猛反撃により、占領地に設置されていたK L Vキャンプはドイツ国内へ「疎開」(Evakuierung

軍事用語で撤退の意味をもつ)し始めた。KLJVは戦況に著しく規定される活動であったため、HJ指導者が再び不足し、また占領地に疎開していた子どもたちが撤退したことで、KLJVの目的の重点は「将来の兵士」と「未来の母親」たる青少年を守ることを主眼とする新たな段階に入った。

戦闘開始後に強化されたHJ団員の軍事教練は、戦時HJの強制的性質が極めて端的に現れた軍事教練キャンプの設置(1942年5月)により一層集中強化され、より短期間により多くの新兵候補養成を可能にした。また単に訓練のみならず、各軍部や武装親衛隊から訓練教官が派遣されたために、自らの軍部に男子を勧誘する募兵活動も同時に行なわれていた。戦時のナチ体制下においては、学校や軍部、親衛隊、突撃隊といった青少年を自らの陣営に取り込もうとした競合する諸機関の中で、HJが従来の管轄圏・影響力を維持するためには強化した軍事教練と戦争動員が最も有効な方策であり、そうすることによってのみHJは自らの必要性和重要性を主張することができた。したがって、戦況の悪化に伴い青少年への軍事的要求が高まると、それに応じてHJの戦争動員も急進化した。さらに戦局の転換は、HJ団員の直接的な戦闘動員である空軍補助員動員の契機となった。青少年は空軍補助員として歩哨勤務、高射砲の照準砲手、照準算定機、レーダー装置、飛行記録機の操作に従事した。その後の無制御な青少年の直接的な戦闘動員の嚆矢であった空軍補助員の動員に対して、動員される側の青少年たちはむしろ期待感を抱いていた。「将来の兵士」を確保するために空襲のない安全な場所への疎開が行われていたのと同時に、極めて危険な地域にHJ団員は動員されていたのである。しかし空軍補助員動員に関しては、HJは、空軍補助員は兵士ではないことを対外的にアピールするためのレットルの役割を果たしただけであり、実際には空軍補助「兵」であった青少年からはHJに対する反発を招いた。

こうしたHJの戦時動員に、すべての青少年が盲目的に従っていたわけではなかった。HJ服務の強制化が進むにつれて、そこから離反し、自由な活動をする青少年が現れた。HJ側は抑圧措置を取り、徹底的な弾圧を試みた。本来HJ内部の秩序維持のための機関であったHJパトロール隊は、HJ入団義務化に伴ってHJの外部に生じた「敵対する青少年同盟」の撲滅のために動員されるようになり、警察権が与えられていなかったにもかかわらず、パトロール隊自身が逮捕を行った。このパトロール隊の投入に加え、HJは内部処罰規定を変更することでHJ内の秩序維持を図ろうとした。1940年4月2日に「戦時HJ懲戒処分規定」が採用された。さらに同年9月17日にはこの懲戒処分規定に「青少年服務拘禁」が加えられた。HJ服務をサボっただけで警察に連行されるという脅迫的なこの規定には、反抗的な青少年を沈黙させる威力が期待されていた。HJ内部での規律の強化と平行して、国家的な弾圧措置も拡大された。1940年3月9日、文字通り戦争に伴う様々な危険から青少年を「保護」することを名目として掲げた、「青少年保護のための警察命令」が出された。しかし実際に問題になっていたのは青少年の非行や犯罪の増加であり、またHJ外で生じていた青少年の「徒党」の結成であった。同命令はこれらに対する予防的方策であった。これらの一連の弾圧措置は、多数の青少年を沈黙させる一方で、それに反発する青少年との対立を先鋭化させた。HJ団員の戦争動員が遂行されていった裏側には、HJ服務の強制化、それに対する青少年の反発、そして脅迫的性質をもった処罰の苛烈化が同時に進行していたのであった。

しかし、ドイツ軍の敗色が濃厚となった最終局面では、HJのほぼ完全な青少年の掌握と戦争動員によって自発的な青少年連合の条件は消失した。HJを通じた青少年の直接的戦闘動員は無制限にエスカレートし、HJ団員たちは「抵抗の中心」として、あまりにも無力な武器で絶望的

な戦いを余儀なくされた。1944年6月、HJ団員からなる「ヒトラー・ユーゲント」師団は連合軍の攻撃をくい止めるために絶望的な戦況にあるフランスに投入された。この最初の投入により、死傷者6,000名が出た。その戦いぶりはその後のHJ団員の模範として事あるごとに積極的に称賛された。その後この師団は「第三帝国」の最終局面に至るまで投入、壊滅、再編を繰り返した。ランゲマルク「神話」がここに再生したのであった。1945年1月に発表されたHJの年次スローガンは「前線援護と戦争動員」であった。アクスマンはそのアピールの中で、青少年に「火の中をくぐり抜ける」覚悟を要求した。今や「前線都市」と化したドイツの各都市では、激しい市街戦が繰り広げられた。圧倒的に不利な戦況の中、HJ団員は前線と化した銃後において兵士として戦った。4月27日には、パンツァーファウストでソ連の戦車を破壊した「徹夜で疲れた小さな少年」に対して鉄十字勲章が授与されたが、これはヒトラーの最後の公務のひとつとなった。HJはこの最終局面において、十分な訓練も受けず、装備も不十分な青少年を絶望的な戦いに投入するための兵士調達機関となったが、これがHJを中心とするナチス・ドイツ教育の最終的帰着点だったのである。

主要参考文献

- Boberach, Heinz : *Jugend unter Hitler*, Düsseldorf 1982.
- Brandenburg, Hans-Christian : *Die Geschichte der HJ. Wege und Irrwege einer Generation*, Köln 1968.
- Dabel, Gerhard im Auftrag der Dokumentations-Arbeitsgemeinschaft KLV e. V. : *KLV. Die erweiterte KINDER-LAND-VERSCHICKUNG KLV-LAGER 1940-1945*, Freiburg 1981.
- Das junge Deutschland, 1939-1942.*
- Griesmayr, Gottfried/Würschinger, Otto : *Idee und Gestalt der Hitler-Jugend*, o.O. 1980³.
- 原田一美「日常的『解放』の罫—ヒトラー・ユーゲントとドイツの若者たち」『規範としての文化—文化統合の近代史』, 平凡社 1990年。
- Hellfeld, Matthias von/Klönne, Arno : *Die betrogene Generation. Jugend in Deutschland unter dem Faschismus. Quellen und Dokumente*, Köln 1987².
- Hermant, Jost : *Als Pimpf in Polen. Erweiterte Kinderlandverschickung. 1940-1945*, Frankfurt a.M. 1993.
- Holzträger, Hans : *Die Wehrtüchtigungslager der Hitlerjugend 1942-1945. Ein Dokumentarbericht*, Ippesheim, 1991.
- Jahnke, Karl Heinz/Buddrus, Michael : *Deutsche Jugend 1933-1945. Eine Dokumentation*, Hamburg 1989.
- Jahnke, Karl Heinz : *Hitlers letztes Aufgebot. Deutsche Jugend im sechsten Kriegsjahr 1944/45*, Essen 1993.
- Kaufmann, Günter : *Das kommende Deutschland*, Berlin 1940.
- Kinz, Gabriele : *Der Bund Deutscher Mädel. Ein Beitrag über die außerschulische Mädchenerziehung im Nationalsozialismus*, Frankfurt a.M. 1991².
- Klaus, Martin : *Mädchen in der Hitlerjugend. Die Erziehung zur deutschen Frau*, Köln 1980.
- Klönne, Arno : *Jugend im Dritten Reich. Die Hitler-Jugend und ihre Gegner. Dokumente und Analysen*, Düsseldorf/Köln 1982.
- Larras, Claude : *Der Zug der Kinder. KLV-Die Evakuierung 5 Millionen deutscher Kinder im 2.*

- Weltkrieg*, München 1983.
- Maschmann, Melita : *Fazit. Kein Rechtfertigungsversuch*, Stuttgart 1964⁵.
- 宮田光雄『ナチ・ドイツの精神構造』, 岩波書店 1991年。
- Muth, Heinrich, Jugendopposition im Dritten Reich, in : *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, 30Jg., 1982, S. 369-417.
- Nicolaisen, Hans-Dietrich : *Die Flakhelfer. Luftwaffenhelfer und Marinehelfer im Zweiten Weltkrieg*, Berlin/Frankfurt a.M./Wien 1981.
- Ramlow, Rudolf : *Herbert Norkus? -Hier! Opfer und Sieg der Hitler-Jugend*, Stuttgart/Berlin/Leipzig 1933.
- Schörken, Rolf : *Luftwaffenhelfer und Drittes Reich. Die Entstehung eines politischen Bewußtsein*, Stuttgart 1985².
- Schätz, Ludwig : *Schüler-Soldaten*, Darmstadt 1974².
- Schirach, Baldur von : *Ich glaubte an Hitler*, Hamburg 1967.